

平成 9 年度

東九州自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ

(西都～清武)

1998

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター 発掘調査報告書第12集
平成9年度 東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書II

正 誤 表

頁	行	誤 (下線箇所)	正
例 言	下から 6 行	主査 橋本英俊	主事 橋本英俊
4	下から 4 行	15 井出口遺跡	15 井手口遺跡
5	下から 3 行	26 本城遺跡	26 本城跡
14	18 行	(黒石土)	(黒色土)
20	第 19 図右	削平を受け <u>て</u> た部分	削平を受けた部分

平成9年度

東九州自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ
(西都～清武)

1998

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局（現 九州支社）の依頼により、平成7年度から東九州自動車道建設工事予定地内に所在する33ヵ所の遺跡の発掘調査を実施しております。

本年度は、継続調査を含めて15遺跡の発掘調査を行いました。これらの調査では、別府原遺跡の約300基という全国有数の縄文時代早期の炉穴の調査をはじめ、後期旧石器時代の10箇所に及ぶ遺物ブロックを確認した長蔭原遺跡、縄文時代草創期の石列遺構が検出された塚原遺跡など注目に値する貴重な資料が数多く検出されました。

本書は、平成9年度の発掘調査の概要を報告したものであります、本書が埋蔵文化財に対する理解と認識を深める一助となることを期待します。

なお、調査に際しまして深いご理解とご協力を戴きました地元の皆様、苛酷な気象条件の下、終始熱心に従事して戴いた作業員の皆様並びに宮崎市教育委員会、国富町教育委員会、佐土原町教育委員会等ご協力戴きました各関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 藤本健一

例　　言

- 本書は、平成9年度に宮崎県教育委員会が日本道路公団福岡建設局（現在、九州支社に改称）の依頼を受けて実施した、東九州自動車道（西都～清武間）建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査概要報告書である。
- 本書で報告する遺跡のうち、調査終了後に字名等を検討した結果、名称を変更した遺跡がある。該当する遺跡については、表1に明記している。
- 本書に使用した遺跡位置図は、国土地理院発行の5万分の1地図を基に作成し、各遺跡の周辺地形図は、日本道路公団九州支社宮崎工事事務所から提供されたものを基に作成した。
- 本書の執筆は各調査担当者が行い、本文目次に明記した。編集は、菅付・戸高が行った。
- 平成9年度の発掘調査の組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 藤本 健一

副所長 岩永 哲夫

事務担当 庶務係 係長 三石 泰博 主任主事 磯貝 政伸 主任主事 吉田 秀子

調査担当 調査第一係 係長 面高 哲郎

(平田追遺跡)	主　　査 川崎 辰巳	(塙原遺跡)	主任主事 松原 宗一
(別府原遺跡・ 西ヶ追遺跡)	主　　査 日高 広人 主　　事 大坪 博子 調査員 太川 裕晴	主　　査 國田 和宏 調査員 谷川亞紀子 (中別府遺跡)	主　　査 江田 誠
(上ノ原遺跡)	主任主事 木本 剛 主　　査 日高 裕司 主　　査 時任 和守	(倉岡遺跡)	主任主事 日浅 雅道 主　　査 青山 尚友
(下屋敷遺跡)	主任主事 吉牟田浩一 調査員 代田 博文	(町屋敷遺跡)	主　　査 鳥原 孝仙
(梅ヶ島遺跡)	主　　事 小山 博 主　　事 橋本 英俊	主任主事 島田 一郎	主任主事 島田 一郎
(長菌原遺跡)	主　　査 時任 和守 主　　査 川崎 辰巳 調査員 代田 博文	(迫内遺跡)	主　　査 山田洋一郎 主　　査 高山 富男
(松元遺跡)	主任主事 柳田 益宏	(内宮田・ 塙田遺跡)	主　　査 倉永 英季 主　　査 高橋 衍二
(木脇遺跡)	主　　査 倉永 英季 主　　査 國田 和宏 調査員 谷川亞紀子	(本城跡)	主　　査 橋本 英俊 調査員 代田 博文
		(整理担当)	主任主事 戸高眞知子
		(調査進行管理担当)	主　　査 菅付 和樹

本文目次

第Ⅰ章 平成9年度の調査.....	(戸高)	1
第1節 調査の経緯.....		1
第2節 調査の概要.....		1
第Ⅱ章 各遺跡の調査.....		6
第1節 平田追遺跡.....	(川崎)	6
第2節 別府原・西ヶ迫遺跡.....	(日高広人)	8
第3節 上ノ原遺跡.....	(木本・日高裕司)	11
第4節 下屋敷遺跡.....	(吉牟田)	13
第5節 梅ヶ島遺跡.....	(小山)	15
第6節 長菌原遺跡.....	(时任)	17
第7節 松元遺跡.....	(柳田)	19
第8節 木脇遺跡.....	(倉永)	21
第9節 塚原遺跡.....	(松原・園田)	23
第10節 中別府遺跡.....	(江田)	26
第11節 倉岡遺跡.....	(日淺)	28
第12節 町屋敷遺跡.....	(鳥原・崎田)	30
第13節 追内遺跡.....	(山田)	32
第14節 内宮田・塚田遺跡—塚田地区—.....	(高橋)	34
第15節 本城跡.....	(橋本)	36

挿図目次

第1図 遺跡位置図(1)	3
第2図 遺跡位置図(2)	4
第3図 遺跡位置図(3)	5
第4図 平田追遺跡 1号横穴墓実測図.....	7
第5図 別府原・西ヶ迫遺跡 周辺地形図.....	8
第6図 別府原・西ヶ迫遺跡 基本土層図.....	8
第7図 別府原遺跡 繩文時代早期遺構分布図.....	9
第8図 上ノ原遺跡 調査区及び周辺地形図.....	11
第9図 上ノ原遺跡 基本土層図.....	11
第10図 上ノ原遺跡 C区集石遺構実測図.....	12
第11図 下屋敷遺跡 調査区及び周辺地形図.....	13

第12図	下屋敷遺跡 基本土層図	13
第13図	梅ヶ島遺跡 基本土層図	15
第14図	梅ヶ島遺跡 調査区及び周辺地形図	16
第15図	長薙原遺跡 調査区及び周辺地形図	17
第16図	長薙原遺跡 基本土層図	17
第17図	松元遺跡 調査区及び周辺地形図	19
第18図	松元遺跡 基本土層図	19
第19図	松元遺跡 集石遺構分布図	20
第20図	木脇遺跡 基本土層図	21
第21図	木脇遺跡 E区58号集石遺構実測図	22
第22図	木脇遺跡 E区6号炉穴実測図	22
第23図	塚原遺跡 調査区及び周辺地形図	23
第24図	塚原遺跡 基本土層図	23
第25図	中別府遺跡 A区基本土層図	26
第26図	倉岡遺跡 土層断面柱状図	28
第27図	町屋敷遺跡 基本土層図	30
第28図	町屋敷遺跡 B区遺構分布図	31
第29図	迫内遺跡 周辺地形図	32
第30図	内宮田・塚田遺跡 塚田地区土層断面模式図	34
第31図	内宮田・塚田遺跡 塚田地区出土遺物実測図・拓影	35
第32図	本城跡 繩張り図	37

表 目 次

第1	東九州自動車道関係遺跡一覧表	2
----	----------------	---

写 真 目 次

写真1	遺物整理作業の様子	
写真2	平田追遺跡 調査区遠景（南よりC区を見る）	6
写真3	平田追遺跡 中世墓検出状況	7
写真4	平田追遺跡 藏骨器出土状況	7
写真5	別府原遺跡 調査区南側（西から）	9
写真6	別府原遺跡 壁穴状遺構（南から）	10

写真7	別所原遺跡	炉穴群（南から）	10
写真8	西ヶ迫遺跡	全景（北から）	10
写真9	上ノ原遺跡	C区遺物出土状況	12
写真10	上ノ原遺跡	C区陥し穴状遺構半裁状況	12
写真11	下屋敷遺跡	出土剥片尖頭器及び三稜尖頭器	14
写真12	下屋敷遺跡	疊群及び遺物出土状況	14
写真13	下屋敷遺跡	陥し穴状遺構完掘状況	14
写真14	梅ヶ島遺跡	A区畦畔検出状況	16
写真15	長菌原遺跡	ブロック検出状況	18
写真16	長菌原遺跡	陥し穴状遺構 疊配置状況	18
写真17	長菌原遺跡	炉穴群検出状況	18
写真18	松元遺跡	集石遺構検出状況	20
写真19	松元遺跡	C区遺物出土状況	20
写真20	松元遺跡	弥生土器出土状況	20
写真21	木脇遺跡	C区全景	22
写真22	塚原遺跡	B区水田検出状況	23
写真23	塚原遺跡	C区全景	24
写真24	塚原遺跡	C区草創期石斧等埋納状況	24
写真25	塚原遺跡	C区石列遺構検出状況	24
写真26	塚原遺跡	C区土壤墓完掘状況	25
写真27	塚原遺跡	C区古墳主体部完掘状況	25
写真28	中別府遺跡	調査区全景	26
写真29	中別府遺跡	出土墨書き土器	27
写真30	倉岡遺跡	調査区全景	28
写真31	倉岡遺跡	A区竪穴住居跡分布状況	29
写真32	町屋敷遺跡	扉状木製品出土状況	30
写真33	町屋敷遺跡	B区堀跡検出状況	31
写真34	追内遺跡	五輪塔検出状況（東から）	33
写真35	追内遺跡	地輪・水輪等検出状況（東から）	33
写真36	追内遺跡	板碑等検出状況（西から）	33
写真37	追内遺跡	横穴及び線刻板碑検出状況	33
写真38	追内遺跡	遺物出土状況（1）	33
写真39	追内遺跡	遺物出土状況（2）	33
写真40	内宮田・塚田遺跡	塚田地区近景（南から）	34
写真41	内宮田・塚田遺跡	塚田地区第Ⅸ層遺物出土状況	35
写真42	本城跡	曲輪Ⅶ 堀切検出状況（北から）	37



写真1 遺物整理作業の様子

第Ⅰ章 平成9年度の調査概要

第1節 調査の経緯

本年度は、昨年度に引き続き日本道路公団福岡建設局の委託を受け、4月2日より、継続箇所の発掘調査および平成8年度までに終了の遺跡分の整理作業に着手した。平成10年3月現在の調査進捗状況は、継続調査分で終了箇所が10遺跡、新規に着手し終了した遺跡が3、来年度に継続する予定の遺跡が2カ所となっている（表1）。

なお、藏向・待居廻の2遺跡については、確認調査の結果、遺構や遺物が発見されなかつたため、本調査の必要はないと判断した。

第2節 調査の概要

平成9年度に調査した遺跡を、その立地から大きく分けると、低湿地の遺跡が5遺跡、台地（丘陵）上の遺跡が10遺跡である。以下、それぞれについて調査の概要を述べる。

低湿地の遺跡については、これまで県内での調査例が極めて少なかったため、調査は試行錯誤の連続ではあったが、塚原・町屋敷・梅ヶ島遺跡で水田区画の検出に成功している。これらの中で注目されるのは町屋敷遺跡で、古墳時代の可能性もある水田跡・溝状遺構・遺存状態の比較的良好な井堰が検出されており、水田と関連遺構を一体として捉えられる一例として重要である。また、同遺跡では県内初の扉状木製品をはじめ、多くの木製遺物が出土している。

台地上に立地する遺跡では、旧石器時代から近世にいたる遺構・遺物が検出されている。特に旧石器時代については昨年度と合わせ多くの成果が得られ、これまで単発的に出土することの多かった石器に、「人の行動」との有機的な関連を付加する根拠となる「ブロック（石器のまとまった出土状態）」が長蔵原遺跡で10カ所、別府原遺跡で7カ所、木脇遺跡で3カ所、下屋敷遺跡で数カ所確認された。同時代の遺構と遺物は、上ノ原遺跡や松元遺跡でも検出されている。

これに次いで、縄文時代早期の遺跡が多く、上記7遺跡と塚原遺跡C区で、多くの早期遺跡に共通して見られるように、土器・石器などの遺物とともに、数の多少はあるものの、集石遺構や散礫が検出されている。加えて、同時代の炉穴・陥し穴状遺構も各々4遺跡で検出されている。炉穴についてはその用途について諸説があるが、別府原遺跡では約300基という全国でも屈指の規模で検出されており、炉穴の研究上、非常に多くの検証材料を提供するものと期待される。陥し穴状遺構には、長蔵原遺跡例のように、逆茂木固定用とみられる「礫の意図的な配置状況」が確認されたものもある。

この他、縄文時代草創期の石列遺構や古墳時代前期の円墳が発見された塚原遺跡（C地区）、古墳時代および古代の集落跡の木脇遺跡、小規模ながら縄文時代晩期から中世にかけての連続する生活の痕跡が見られる倉岡遺跡、横穴墓1基と中世墓2基を検出した平田追遺跡、中世の山城の構造を確認した本城跡など、各遺跡に見るべき成果は多い。来年度も継続調査をする迫内遺跡では、中～近世の石塔群を検出しており、新たな成果が期待される。

なお、発掘調査と並行して、出土した遺物の整理作業も、昨年度に引き続き、より規模を大きくして進めている。調査終了の遺跡については、出土遺物整理による基礎資料をもとに、来年度より順次調査報告書を刊行し、調査成果を公表していく予定である。

表 1 東九州自動車道関係遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名(旧遺跡名)	所在地	調査期間(平成9年度)	調査の結果、調査不要(9年度)
1	箱崎 大字須崎	西都市大字黒生野字藏敷	平成9年6月3日～平成9年6月12日	確認調査の結果、調査不要(9年度)
2	小田河原 大字須崎	西都市大字黒生野字大計屋敷	平成9年6月3日～平成9年6月12日	10年度に調査予定
3	佐土原田 大字上田	佐土原町大字上田島字平田追ほか	平成9年4月2日～平成9年5月30日	確認調査の結果、調査不要(8年度)
4	草田追 大字須崎	西都市大字施野田字別府原ほか	平成9年4月7日～平成9年12月8日	終了(8・9年度)。改称
5・6	別府原・西ヶ原 (旧 山内・紫雲・梅ヶ原・氣賀)	佐土原町大字西上那珂字上ノ原	平成9年4月7日～平成9年3月20日	終了(8・9年度)
7	下屋敷 大字須崎	佐土原町大字西上那珂字下屋敷ほか	平成9年4月7日～平成9年12月18日	終了(8・9年度)
8	鶴ヶ島 大字須崎	佐土原町大字西上那珂字幾ヶ島	平成9年8月4日～平成9年12月15日	終了(9年度)
9	鶴ヶ島 大字須崎	佐土原町大字西上那珂字持居屋	平成9年4月7日～平成9年12月5日	確認調査の結果、調査不要(9年度)
10	鶴ヶ島 大字須崎	佐土原町大字西上那珂字長瀬原	平成9年4月7日～平成9年12月5日	終了(8・9年度)
11	鶴ヶ島 大字須崎	佐土原町大字西上那珂字上追	平成9年4月7日～平成9年12月5日	終了(8・9年度)
12	上ノ原 大字須崎	国富町大字三名字上松尾	平成9年4月7日～平成9年9月5日	確認調査の結果、調査不要(8年度)
13	上ノ原 大字須崎	国富町大字木脇字松元	平成9年4月7日～平成9年9月5日	終了(8・9年度)
14	松元 大字須崎	国富町大字木脇字井手口ほか	平成9年4月2日～平成10年3月27日	終了(8・9年度)
15	木元 大字須崎	国富町大字木脇字上ノ原ほか	平成9年4月15日～平成9年10月23日	終了(8・9年度)
16	木元 大字須崎	国富町大字木脇字中別所ほか	平成9年8月20日～平成10年1月30日	終了(9年度)
17	坂ノ原 大字須崎	宮崎市大字金崎字寺尻ほか	平成9年5月16日～平成10年11月8日	終了(9年度)
18	中別所 大字須崎	宮崎市大字金崎字寺尻ほか	平成9年4月2日～平成10年3月4日	終了(8・9年度)
19	倉ノ原 大字須崎	宮崎市大字糸原字町屋敷ほか	平成9年4月2日～平成10年3月4日	確認調査の結果、調査不要(8年度)
20	虹ヶ原 大字須崎	宮崎市大字糸原字北田ほか	平成9年10月20日～平成10年3月4日	10年度に繼續(9年度)。改称
21	北田 大字須崎	(旧 上浦)	宮崎市大字富吉字追ほか	確認調査の結果、調査不要(8年度)
22	追 大字須崎	宮崎市大字富吉字野添	宮崎市大字富吉字前	確認調査の結果、調査不要(8年度)
23	北田 大字須崎	宮崎市大字富吉字野添	宮崎市大字富吉字前	確認調査の結果、調査不要(8年度)
24	牛首村古墳跡 大字須崎	宮崎市大字長嶺字内宮田ほか	宮崎市大字長嶺字内宮田ほか	確認調査の結果、調査不要(8年度)
25	内宮田 大字須崎	宮崎市大字富吉字追田ほか	宮崎市大字長嶺字内宮田ほか	確認調査の結果、調査不要(8年度)
26	米崎 大字須崎	宮崎市古城町本城	宮崎市古城町本城	終了(8・9年度)。改称
27	白ヶ野 大字須崎	清武町大字船引字白ヶ野ほか	清武町大字船引字白ヶ野ほか	終了(8・9年度)
28	上の原 大字須崎	清武町大字船引字上の原ほか	清武町大字船引字上の原ほか	終了(7年度)
29	神須原 大字須崎	清武町大字船引字安ヶ野	清武町大字船引字安ヶ野	終了(7年度)
30	神須原A 大字須崎	清武町大字船引字櫻原原	清武町大字船引字櫻原原	終了(7年度)
31	竹ノ原 大字須崎	清武町大字今泉字竹ノ原ほか	清武町大字今泉字竹ノ原ほか	終了(7年度)
32	下里野 大字須崎	清武町大字今泉字下里野ほか	清武町大字今泉字下里野ほか	終了(7年度)
33	水ノ原 大字須崎	清武町大字今泉字水ノ原	清武町大字今泉字水ノ原	終了(7年度)

遺跡分布図①



第1図 遺跡位置図(1)

- 1 蔵向遺跡 2 大辻屋敷遺跡 3 小田河原遺跡
- 4 平田迫（旧 佐土原村古墳周辺）遺跡
- 5・6 別府原・西ヶ迫（旧 山内・桜原・西ヶ迫・黒賀）遺跡
- 7 上原遺跡 8 下屋敷（旧 下屋敷第一・第二）遺跡 9 梅ヶ島遺跡
- 10 待居廻遺跡 11 長菌原遺跡 12 上ノ迫遺跡 13 上松尾遺跡

遺跡分布図②



第2図 遺跡位置図(2)

- 14 松元遺跡 15 井出口遺跡 16 木脇遺跡 17 塚原遺跡
18 中別府遺跡 19 倉岡遺跡 20 町屋敷遺跡 21 北田遺跡
22 迫内（旧 上菌）遺跡 23 野添遺跡 24 生目村古墳周辺遺跡
25 内宮田・塚田（旧 内宮田・塚田・清田迫）遺跡

遺跡分布図③



第3図 遺跡位置図(3)

- | | | |
|-----------|-----------|--------------|
| 26 本城遺跡 | 27 白ヶ野遺跡 | 28 上の原第一遺跡 |
| 29 権現原B遺跡 | 30 権現原A遺跡 | 31 竹ノ内・杉木原遺跡 |
| 32 下星野遺跡 | 33 永ノ原遺跡 | |

第Ⅱ章 各遺跡の調査

第1節 平田迫遺跡 (佐土原町大字上田島字平田迫ほか) ひらたきこ

1 遺跡の立地

本遺跡は、西都市に隣接する佐土原町北西部にある。調査区の南側と北側には標高約45mの丘陵地があり、谷間は畑地・水田として利用されてきた標高約13mの平坦地となっている。近くには県指定の佐土原村古墳（横穴）が分布している。また、調査地から西約3kmに都於郡城跡が所在している。調査を進めるにあたって、南側の丘陵をA区、谷間の平坦地をB区、北側の丘陵をC区とした。昨年度は、B区の本調査を実施し、遺物として奈良・平安時代の土師器や須恵器約3,000点が出土し、遺構として平安時代の畠跡を検出した。引き続き本年度は、A区とC区の本調査を開始し、5月に終了した。その概要是以下のとおりである。

2 調査の概要

（1）横穴墓（第4図）

C区の東側斜面標高約40mの地点で、7世紀頃のものと思われる横穴墓1基を検出した。天井の崩落が激しく、危険な状態であったため、重機にて天井部を取り除き検出作業を行った。羨道の長さ200cm、幅140cm、現存高45cm、玄室は平入り・両袖・長方形プランであり、玄室規模は260cm×180cmであった。玄門前には板閉塞のためと思われる長さ140cm、幅30cm、深さ10cmの溝跡が確認された。玄室内の形状や遺物の出土状況から、中世の墳、拡張・再利用されたものと思われ、当初の壁面が床面から約30cmしか残っていなかった。前庭部からは7世紀の須恵器杯身3点が出土した。

（2）中世墓・蔵骨器

C区の北東斜面標高約32mの地点において、配石遺構が4カ所（A～Dと仮称）あり、平たい河原石を用いていたものであった。それぞれ円形で一番規模の大きいAは直径約2mであった。配石の数は、A～535個、B～1,633個、C～297個、D～276個であった。A・Bの配石の下より常滑焼の蔵骨器2個が出土した。いずれも須恵質の蓋は伴わなかつたが、器内の上部より長さ12cmの平らな河原石が出土し、蓋として利用されたものと思われる。この石の下からは、多数の火葬骨が出土した。火葬骨の分析については、鹿児島大学歯学部の口腔解剖学第2教室に依頼中である。

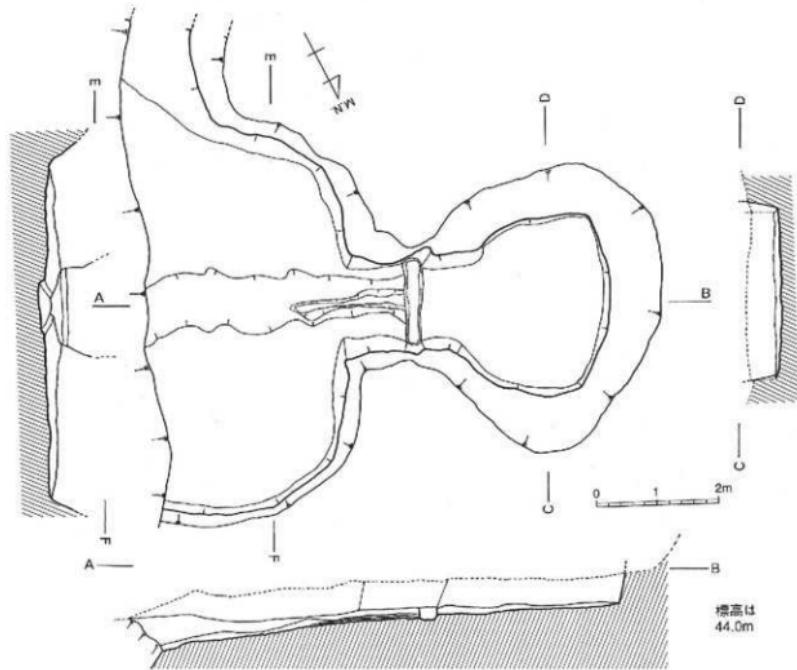
1号蔵骨器はN字口縁の小壺で、口径14.0cm、器高15.0cm、底径12.7cm、色調は褐色である。2号蔵骨器もN字口縁の小壺で、口径15.5cm、器高16.4cm、底径13.2cm、色調は赤褐色である。ともに、肩部には常滑特有の2.2×4.9cmの長方形の押印（格子文と放射文の組合せ）が見られる。

（3）見張り台



写真2 調査区遠景（南よりC区を見る）

A区・C区とともに山頂付近は造成面が確認された。山頂に通する尾根には、幅2m、深さ1m規模の大きな堀切が3か所検出された。さらに尾根伝いにA区で7か所、C区で6か所の小さな堀切が検出されている。遺構の形状から、中世の見張り台と思われる。当地は北西は西都、西は都於郡城へと通する通過地にあり、交通上の要地であるとともに、標高45mの山並みが連なることから、見張り台としては絶好の地であったと考えられる。掘立柱建物跡などの遺構は検出されなかったが、A区の山頂付近を中心に中世の土師器片が20数点出土している。



第4図 平田追遺跡 1号横穴墓実測図



写真3 平田追遺跡 中世墓検出状況



写真4 平田追遺跡 藏骨器出土状況

第2節 別府原・西ヶ迫遺跡 (西都市大字鹿野田字別府原ほか)

1 遺跡の立地

別府原遺跡は、西都市南西部と佐上原町北西部にかけて広がる都於郡・仲間原台地（標高約100m）のほぼ中央付近に位置する。調査地周辺は、北側に急崖が接し、南側を開析谷が挟んだやや平坦な地形に立地する。また、開析谷を二つ隔てた南側丘陵上には西ヶ迫遺跡が立地する。この谷下には湧水点をいくつか見ることができ、遺跡の立地要件を満たしている（第5図）。

2 遺跡の概要

昨年度に引き続き、別府原遺跡は南側の開析谷周辺と市道・都於郡一佐土原線を挟んだ北西側部分を、また新たに西ヶ迫遺跡の調査を行った。

層序（第6図）は、宮崎平野部において比較的典型的な層序であり、鍵層としてⅢ層にアカホヤ火山灰層、VI層には小林軽石風成二次堆積層、IX層では始良・丹沢火山灰（AT）層、XII層ではアワオコシスコリア層が確認されている。なお、西ヶ迫遺跡ではIX層が見られなかった。遺物包含層はIV～V、VIa、VII、X～XI層でそれぞれ確認されている。

別府原遺跡の大半および西ヶ迫遺跡の北側調査区はIV層まで開墾による削平を受け、またゴボウ栽培によるトレンチャー跡が幾条も見られ、一部はIX層まで掘込まれており、遺物の包含状況はあまり芳しいものとはいえない。ここでは、各遺跡の概要について時代別に触れていくことにする。

別府原遺跡

(1) 旧石器時代

文化層は3層（ナイフ形石器文化期I・II、細石器文化期）確認されている。

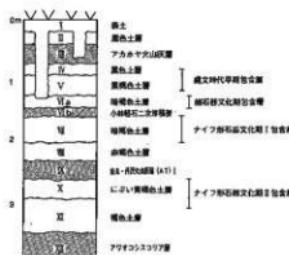
ナイフ形石器文化期Iでは、X～XI層上面において礫群が5基検出されている。遺物では石核、剥片等が出土している。

ナイフ形石器文化期IIでは、VII層において礫群14基、配石造構1基が検出されている。遺物では7ヵ所でブロックを確認し、ナイフ形石器、台形様石器、三稜尖頭器、スクレイバー、石核、剥片、台石等が出土している。

細石器文化期では、VIa層において陥し穴状造構18基、土坑4基、礫群1基、配石造構2基等が検出されている。陥し穴状造構は調査区の北西側に多く分布していて、平面形は楕円形、円形の2タイプに分けられ、底面に小穴があるもの（1個、2個、多



第5図 周辺地形図(s=1/6000)



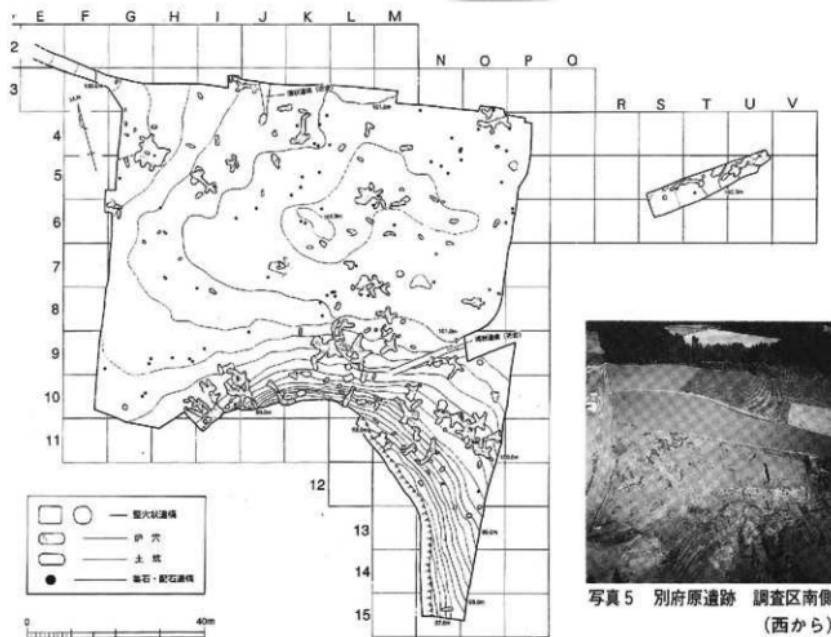
第6図 基本土層図

数) といものに分けることができる。また遺物では、細石核(船野型、野岳型)、細石刃等が出土している。しかし、包含層出土のものは少なく、大半は縄文時代早期の遺構中に流れ込んでいる状況であった。

(2) 縄文時代早期

IV~V層において竪穴状遺構15基、炉穴約300基、土坑約40基、集石遺構58基、配石遺構19基等が確認されている(第7図)。炉穴は単独のものと切り合いにより群をなすもの(単独38基、重複36群)がみられ、調査区中央より東側にかけてのやや平坦な面に単独のものが多く、南側傾斜面に重複するものがより密にみられる。また傾斜面で確認されたものは規模も大型になる傾向がある。集石遺構および配石遺構は、やや平坦な面にまんべんなく確認されている。そのうち、集石遺構は掘り込みをもつものと掘り込みをもたないものとに分けることができ、掘り込みをもたないものが多くみられる。

また遺物に関して、貝殻条痕文土器、打製石鎌、打製石斧、局部磨製石斧、楔形石器、台石、磨石等が出土している。出土比率では、はるかに石器量が高く、また石器組成の中では打製石鎌、局部磨製石斧が中心を占める。



第7図 別府原遺跡 縄文時代早期遺構分布図(s=1/1100)

写真5 別府原遺跡 調査区南側
(西から)



写真6 別府原遺跡 竪穴状遺構 (南から)



写真7 別府原遺跡 炉穴群 (南から)

(3) その他の時代

近世の遺構では道路状遺構が3条検出されており、埋土中より陶磁器、擂鉢、瓦等の遺物が確認されている。なお、時期不明ではあるが、陥し穴状遺構1基、竪穴状遺構1基（ともにアカホヤ火山灰降灰以後）が確認されている。

西ヶ迫遺跡

(1) 縄文時代早期

遺構は集石遺構が約20基確認されていて、その大半が掘込みを持つタイプである。また、そのうち南側調査区の中央付近で集石遺構5基が群集して見つかっている。遺物はそれほど多くなく、押型文土器、打製石鏃、磨石等が出土している。

(2) その他の時代

北側および南側調査区で土坑が3基検出されている。時期は不明だが、埋土状況よりアカホヤ火山灰降灰以後のものと推定される。またVI層面で数か所トレンチを設定し、三稜尖頭器、剥片等が数点確認されている。

3まとめ

以上、両遺跡の概要について簡単に述べてきたが、2ヵ年にも及ぶ調査によって、多くの貴重な資料を得ることができた。

中でも別府原遺跡において縄文時代早期の炉穴が約300基確認されており、分布がさらに周辺に広がる可能性がある。これほど炉穴が多数確認された例は稀であり、その意義は大きい。

そのうち1基には、炉部付近で多数の炭化種子が確認されている。調査状況より直接火をかけたのではなく炉穴を使用しなくなった後、一時的に溜められたものと思われ、炉穴の性格を考えていく上で貴重な成果を得ることができた。その他に竪穴状遺構や土坑、集石遺構、配石遺構等も確認されており、それらの遺構と遺物をとおして縄文時代早期の集落の在り方について今後検討してゆく必要がある。



写真8 西ヶ迫遺跡 全景 (北から)

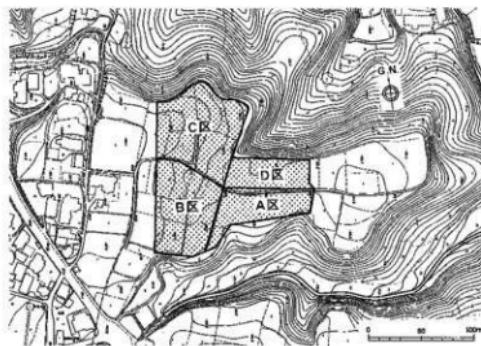
第3節 上ノ原遺跡 (佐土原町大字西上那珂字上ノ原)

1 遺跡の立地

本遺跡は佐土原町の北西部の標高約90mの台地上に立地し、南北に谷、小河川がある。谷間を挟んで南には下屋敷遺跡があり、そこから東約3.5kmの台地上に船野遺跡（昭和45年、別府大学調査）が所在している。

2 調査の概要

調査に当たっては、対象区域を南東部（A区）、南西部（B区）、北西部（C区）、北東部（D区）に四分割し、平成8年度はA区の調査を行い、平成9年度はB区、C区、D区の調査を進めている（第8図）。



第8図 上ノ原遺跡 調査区及び周辺地形図

調査地の基本層序は右図の通りで、I層（表土）からXIII層（アワオシ）まで確認できたが、調査区全体にわたってゴボウ作付のためのトレンチャーによる擾乱を受け、場所によってはX層まで影響を受けていた。

（1）後期旧石器時代

B区Ⅶ層において砾群6基を検出した。うち3基は直径約1.5mの円形プランで構成砾250個～300個、他の3基は円形プランで構成砾30個～40個だった。構成砾の大半は熱を受け赤化し割れていた。また、いずれも明確な掘り込みは確認できなかった。C区Ⅶ層においても砾群8基を検出している。

B区、C区のⅦ層直上で土坑7基、陥し穴状遺構7基を検出した。陥し穴状遺構のうち5基の床面には、逆茂木痕と思われる小穴が確認できた。いずれも埋土は小林軽石を含む層が主で、時期的には小林軽石降灰以降のものと思われる。

Ⅸ層からⅩ層にかけてナイフ形石器、台形様石器、三稜尖頭器、剥片尖頭器、スクレイパー、石核、敲石、磨石、台石が出土しており、B区では剥片や碎片とともにブロック状で出土した。ナイフ形石器、台形様石器、三稜尖頭器、剥片尖頭器、スクレイパー、石核の石材には頁岩が多く、一部、チャ

I	表土
II	褐色土
III	黒色土
IV a	アカホヤ二次堆積層
IV b	アカホヤ火山灰層
V	黒色土
VI a	黒褐色土
VI b	褐色土
VII	小林軽石を含む暗褐色土
VIII	暗褐色土
IX	明黄褐色土
X	姶良・丹沢火山灰層
XI	黒褐色土
XII	赤褐色土
XIII	アワオシスコリア層

第9図 基本土層図

一ト、黒曜石がみられた。また、敲石、磨石、台石の大半は砂岩、尾鉢酸性岩類を石材としていた。出土状況から文化層は二時期にわたるものと思われるが、詳細は検討中である。



写真9 上ノ原遺跡 C区遺物出土状況



写真10 C区陥し穴状構造半截状況

(2) 繩文時代早期

B区、C区VI層において集石遺構11基、炉穴5基を検出した。

このうち集石遺構1基、炉穴1基で土器が出土している。集石遺構の多くは直径約1m~1.5mの円形プランで構成蝶は赤化した円蝶が多く、いずれも検出面から20~30cmの掘り込みが確認できた。

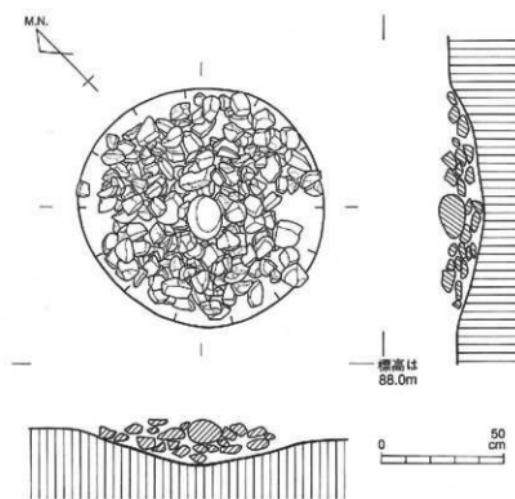
VIa層から貝殻条痕文土器片(前平式系、吉田式)、貝殻刺突文土器片、無文土器片が出土した。

また、V層下層からVIa層にかけて打製石鎌、使用痕のある剥片、剝片、敲石、磨石、台石が出土した。

打製石鎌、使用痕のある剥片、剥片の多くは頁岩を石材とし、一部黒曜石がみられた。敲石、磨石、台石の大半は砂岩、尾鉢酸性岩類を石材としていた。

縄文時代早期の主な包含層はVIa層と思われる。

D区では縄文早期面から集石遺構、炉穴群、土坑が検出されているが、現在調査中である。



第10図 上ノ原遺跡 C区集石遺構実測図

第4節 下屋敷遺跡 (佐土原町大字西上那珂字下屋敷ほか)

1 遺跡の立地

本遺跡は、西都市に隣接する佐土原町の北西部に位置し、東西に伸びる標高85m～90mの台地上にある。調査地の北側は緩やかに傾斜し、湧水のある小さな谷を挟んで上ノ原遺跡に接する。また、南側は急崖を形成しその下に新宮川が流れしており、梅ヶ島遺跡に接する。さらに、同じ台地の1km東方には船野遺跡がある。

なお、本遺跡の発掘調査は、便宜上A区～D区の4つの調査区に分けて、平成8年度から継続して実施した(第11図)。平成9年度は、B区～D区を中心調査を実施した。また、県道の迂回路建設に伴う借地部分(E区)の発掘調査も行った。

2 調査の概要

(1) 層序

本遺跡の基本層序は、第12図の通りである。C区においては、場所によって層の厚さに多少の差があるが、ほぼ基本層序通りの堆積が見られる。

しかし、D区においては、VII層からX層にかけての堆積がほとんど見られず、粘質の明褐色土層となり、その下はイワオコシ軽石層であった。また、本調査区はゴボウ栽培のためのトレッチャーより、大部分が攪乱を受けている。

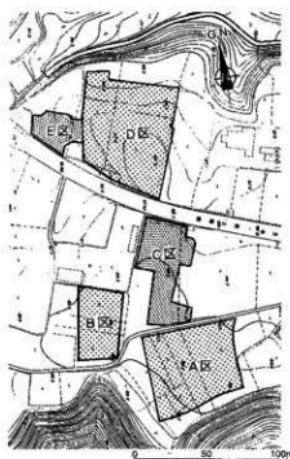
主な包含層はIII層、IVa層が縄文時代早期、IVb層、VI層、VII層が後期旧石器時代である。検出された主な遺構・遺物は次の通りである。

(2) 後期旧石器時代

VII層及びX層においては、ナイフ形石器や剥片尖頭器、三棱尖頭器、スクレイバー、石核、剥片、敲石、磨石等も出土している。さらに、これらの石器が群をなしている「ブロック」もC区とD区で數カ所確認されている。

なお、C区にはV層(始良・丹沢火山灰層)が残存していなかった。しかし、VI層下位の土層はテフラ分析の結果から、出土層中に始良・丹沢火山灰(A T)に由来するものと思われる火山ガラスが含まれており、これらの石器が出土した層位はA T層の上位にあると考えられる。また、石器の形態からも、A T層以後の遺物と考えられる。

遺構としては、礫群がC区で3基、D区では30基以上検出された。礫群のほとんどは掘り込みを有せず、直径が50cm以下の中規模なものから成り、礫数も少ない。また、礫のほとんどは赤変しており、



第11図 調査区及び周辺地形図

	V	V	V
I	耕作土		
II	アカホヤ火山灰層		
III	黒色土		
IVa	暗褐色土		
IVb	褐色土		
V	小林軽石を含む黒褐色土		
VI	暗褐色土		
VII	にぶい黄褐色土		
VIII	始良・丹沢火山灰層		
IX	黒褐色土		
X	赤褐色土		
XI	アワオコシコリア層		
XII	明褐色土		
XIII	イワオコシ軽石層		

第12図 基本土層図

ある程度集中した分布をなしているものや、まばらな状態のものも見られた。特にD区においては、礫群の分布は調査区の東側に集中しており、遺跡中の空間の利用と地形との関連等を考える上で注目される。また、これらの礫群と遺物、ブロックとの関連及び時期等については、今後検討を要する。

IV b層（褐色土）においては、黒曜石製の細石核や細石刃、その他黒曜石のチップ等が多数出土している。これらのチップはある程度まとめて出土しており、ブロックを形成しているものもあり、細石器文化の存在がうかがえる。

遺構としては、陥し穴状遺構3基、土坑3基、土坑群等が検出されている。これらの遺構は、埋土の状況から小林軽石降灰以後に形成されたと思われるが、詳しい時期については今後検討していきたい。

(3) 繩文時代早期

IV a層及びⅢ層においては、黒曜石やチャート製の打製石鎌、砂岩製の局部磨製石斧、剥片等が出土している。また、吉田式系の土器や押型文土器、無文土器等も出土している。

遺構としては、D区においてⅢ層（黒石土）から集石遺構が3基検出された。3基のうち2基は直径が80cm～90cm程度の円形をなし、拳大の大きさの礫が集中している。また、残りの1基は直径が2m程度もあり、礫数は多く拳大より大きな礫が多い。これらの集石遺構を構成する礫は、表面が赤変しており、中には黒いスス状の炭化物が付着しているものもある。また、いずれの集石遺構にも、下部に浅い掘り込みが確認できたが、敷石等については見られなかった。



写真12 磕群及び遺物出土状況

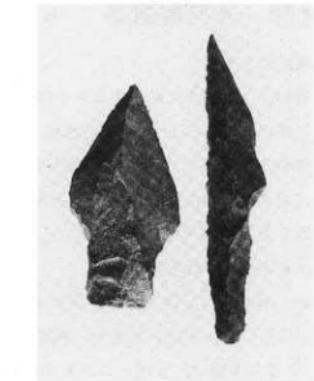


写真11 出土剥片尖頭器及び三稜尖頭器

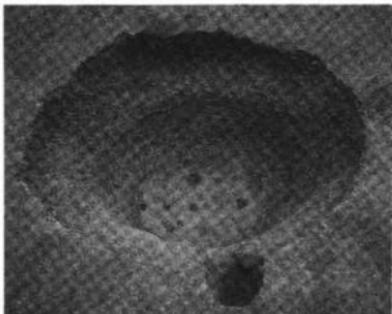


写真13 陥し穴状遺構完掘状況

第5節 梅ヶ島遺跡（佐土原町大字西上那珂字梅ヶ島）

1 遺跡の立地

本遺跡は、佐土原町の北西部に広がる水田地帯に位置している。北東部に下屋敷遺跡のある台地と南西部の長瀬原台地に挟まれており、近くには新宮川が流れる。昭和58年に大規模な整備が行われており、それ以前には新宮川が蛇行し狭い水田や沼地が存在した。

2 調査の概要

確認調査を2回にわたって行った。第一次確認調査の結果、約2m下の第13層の第VI層の青黒色層から約2,000個のプラントオバールが検出され水田の存在が確認された。第二次確認調査では、第VI層の青黒色層の範囲を確認し、また旧新宮川の河川跡を検出した。本調査では、2回の確認調査の結果を踏まえて、青黒色層の確認がされたA区・B区の2カ所を調査区として設定した（第14図）。排水対策として、深さ約2~2.5mの外周排水溝を設け、土層断面の観察結果から調査する範囲を決定し、あわせてプラントオバール分析をA区、B区とも再度行い、第VI層の青黒色層からA区は約2,000個、B区か

らは約1,000個プラントオバールが検出された。調査では、台風や大雨のために調査区が水没することが度々あり調査に支障をきたした。

A区は、新宮川と町道に挟まれた水田地帯である。調査の結果、自然堤防と思われる微高地と旧新宮川の河川跡に挟まれた谷状の低地であることを確認した。土壤分析の結果、第VI層の青黒色層は、常に水の影響を受けており湿田であることが分かった。調査では、第V層から流れ込みと思われる土器片が多く出土した。主なものとしては、平安時代の布目痕土器と16世紀の輸入陶磁器片がある。特に土器が集中した所があったが、水路跡等の検出はできなかった。調査は第V層から精査を行い、同層下部から畦畔と思われる筋状の遺構を検出した。遺構は、自然堤防と思われる微高地から低地に下る傾斜を利用した区画の小さい棚田状の水田と考えられる。微高地の水田は区画が非常に小さく、低地になるほど区画が大きくなっているように考えられるが、小区画の水田は検出できたが、区画の大きい水田は畦畔が部分的にしか検出できなかった。水田の時期については、現在検討中である。

B区は、北東部の台地が落ち込んでいる水田地帯で、自然に傾斜した地形を利用した棚田状の水田と考えられる。調査では、傾斜に沿った木杭の列を検出したが、畦畔等の遺構の検出はできなかった。遺物としては近世から近代にかけての陶器が出土しており、木杭は時代的には近世から近代のものと思われる。また時期不明の木製品が出土した。

I	表土
II a	青灰色（5 BG 6 / 1） 鉄分を多く含む。硬質。
II b	青灰色（5 BG 6 / 1） オリーブ黒のマンガン斑を含む。
III a	青灰色（10 BG 10 / 1） 鉄分を多く含む。やや粘質。
III b	青灰色（10 BG 10 / 1） 暗オリーブのマンガン斑を含む。
IV	黄色（2.5 Y 7 / 8） 鉄分を含む。やや硬質。
V	褐色（5 YR 5 / 1） 鉄分を少量含む。やや粘質。
VI	青黑色（5 BG 2 / 1） 鉄分を含む。粘質強。
VII	灰白色（10 Y 7 / 2） シルト質

第13図 梅ヶ島遺跡 基本土層図



第14図 梅ヶ島遺跡 調査区及び周辺地形図 (s=1/4000)

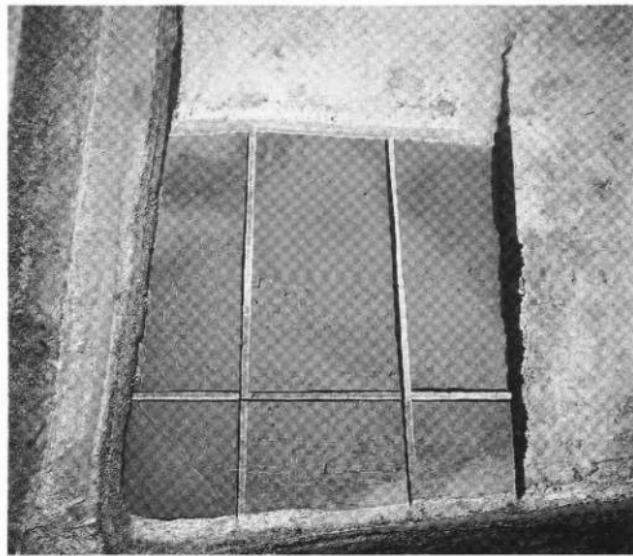


写真14 梅ヶ島遺跡 A区畦畔検出状況

ながそんばる 第6節 長園原遺跡（佐土原町大字西上那珂字長園原）

1 遺跡の立地

本遺跡は、佐土原町の西部に位置し、国富町及び西都市に隣接する。東西に舌状に伸びる標高86mの台地の根幹部に立地し、周りを谷に囲まれている。南西には石崎川が流れ、北東の谷向かいの台地には、昭和45年に別府大学が発掘調査した船野遺跡（佐土原町）が所在している。

2 調査の概要

遺跡の調査は、平成8年度にA区・B区・C区・D区を行い、9年度は、D区・E区の一部及びF区の調査を実施した（第15図）。



第15図 長園原遺跡 調査区及び周辺地形図 ($s=1/4000$)

当地の基本層序は第16図のとおりで、アカホヤ火山灰は耕作等により消滅している箇所が多く、A区南側からF区北側にかけての埋没谷にアカホヤ層や黒色土層が残る状態であった。本遺跡ではAT層が確認できなかった。またIV層も上部は暗褐色土、下部は明褐色土に分けられるが、明確に分けることは困難であった。各調査区によっても各層の厚さが違っている。調査地内は、牛蒡作付けのためのトレンチャーにより表土から120cm～130cm、IV層まで擾乱を受けている。遺物包含層は、IV層上部が縄文時代早期で下部が細石器文化期、VI・VII層がナイフ形石器文化期である。

（1）後期旧石器時代

VII層では、D・E・F区で礫群が6基検出されている。礫群は、長軸が100cm前後の円形に近い橢円形をしており、掘り込みは確認できなかった。礫の個数は数十個程度で、礫群を構成している礫の数は比較的少ない。

遺物は、ナイフ形石器、剥片尖頭器、スクレイバー、敲石、磨石、台石、剥

I	耕作土
II	アカホヤ火山灰層
III	黒色土
IV	褐色土
V	小林耕さき古C型點踏土
VI	暗褐色土
VII	褐色土
VIII	赤褐色土
IX	アワコシスコリニア層
X	イワコシ軽石層

第16図 基本土層図

片等が多数出土しているが、D区で4カ所、E区で1カ所、F区で2カ所の計7カ所のブロックが確認されている。

IV層では、F区Q1グリッドで、構成砾32個の砾群(95cm×60cm)が1基検出されている。砾はほとんどが焼けた角砾である。また、このグリッドでは、珪原型細石核や細石刃が頁岩製のナイフ形石器、剥片等とともにブロックとして出土した(写真15)。

縄文時代早期

早期の遺構は、集石遺構7基、土坑16基、陥し穴状遺構9基、炉穴22基(うち炉穴2群)、竪穴状遺構1基が検出されている。

集石遺構は、調査区の南側にあるE区とF区で全て検出されている。陥し穴状遺構には、小穴の中の逆茂木を固定するために砾を入れてあるものが3基あった。3基の中の1基(135cm×65cm、深さ140cm)の小穴には4個の煎餅状の平たい砾を選び、逆茂木の太さに合わせ規則的に組み合わせて固定力を高めるという工夫をしていた(写真16)。

写真15 ブロック検出状況



写真16 長菌原遺跡 陥し穴状遺構砾配置状況

内面はヘラナデ等で平滑にした貝殻文土器及び無文土器、押型文土器等が出土している。また黒曜石・チャート製の打製石器が出土地してい。

炉穴の2群は、切り合い状態で検出した(写真17)。

IV層が一部しか残っていないため、出土遺物は少ない。縄文時代早期前半頃に位置付けられる外表面は浅い貝殻文で

内面はヘラナデ等で平滑にし

2年間の調査の結果、後期旧石器時代の遺物がブロックとして10カ所検出できた。現在遺物の整理作業中であるが、ナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、スクレイパー、細石刃等の多くの製品が約100点ほど確認されているので、詳細な時期、石器の組成等については、今後検討したい。

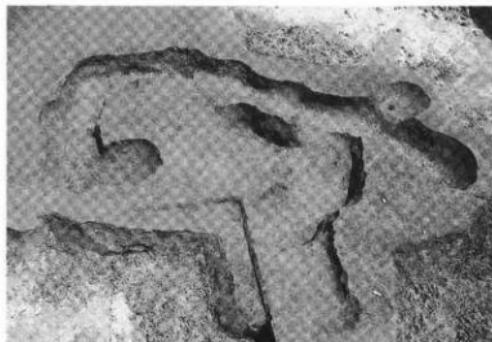


写真17 長菌原遺跡 炉穴群検出状況

第7節 松元遺跡 (国富町大字木脇字松元)

1 遺跡の立地

本遺跡は、国富町の南東部に位置し、宮崎市境に接した標高約55mの南北に伸びた舌状台地に立地している。調査地周辺の地形は、西側と南側は崖、北側と東側は山林が続いている。東側の谷下に湧水点が確認されている。

2 調査の概要

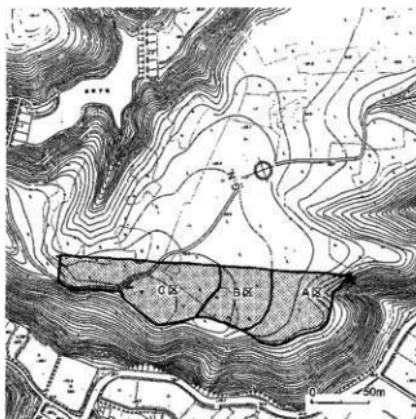
本調査は、平成8年度の調査に引き続き行った。調査区は、南からA区、B区、C区の3つに分け、本年度はA区の一部、B区、C区の調査を行った(第17図)。

本遺跡の層序は、第18図に示したとおりであり、年代の指標となる火山灰層は、IV層のアカホヤ火山灰層、XII層の始良・丹沢火山灰層(A.T.)である。

A区は、III層から弥生時代の甕形土器片が2点出土した。一つは中期と見られる充実した底部、もう一つは後期と見られる口縁部～胸部であった。また、古墳時代中期と見られる高杯、甕形土器、刻目突帯文土器等の土器類が出土した。遺構は、IV層より上から掘り込まれたと考えられる堅穴状遺構が4基検出された。

B区はA区とC区の谷間に位置し、遺構は確認されなかった。以下、本年度確認された遺構・遺物について記述する。

I 表土
II 黒色土
III 褐色土
IV アカホヤ火山灰層
V 褐色土
VI 若干暗い褐色土
VII 小林鉱石を含む暗褐色土
VIII 褐色土のブロック 混じり暗褐色土
IX 若干暗い褐色土
X 黄色がかかった褐色土
XI 暗灰褐色砂質土
XII A.T.層



第17図 松元遺跡 調査区及び周辺地形図

(1) 旧石器時代

A区の一部のⅣ層からナイフ形石器、三棱尖頭器、C区のVI層において細石核、剥片等が出土した。石材は、主に頁岩が使用されていた。

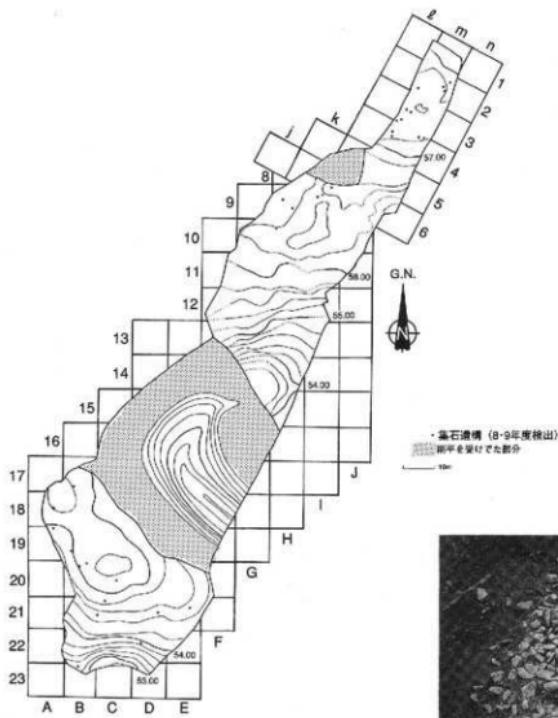
遺構は、A区の一部のⅣ層で集石遺構3基が検出されたが、掘り込みはなかった。そのうち2基は直径約1mの円形を呈している。

(2) 縄文時代早期

C区のV～VI層にかけて貝殻条痕文土器、塞ノ神式土器、平柄式土器が出土した。石器は打製石器、敲石、磨石等が出土した。石材は、黒曜石、頁岩、砂岩、溶結凝灰岩(尾鈴酸性岩類)等であった。

集石遺構は、19基検出された。大半が、直径1.5m～2m程の大きさで、黒曜石片、土器片、炭化物が混入していた。

第18図 基本土層図



第19図 松元遺跡 集石遺構分布図

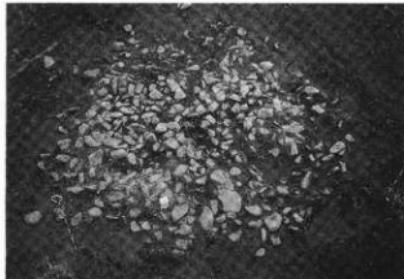


写真18 松元遺跡 集石遺構検出状況



写真19 C区遺物出土状況



写真20 弥生土器出土状況

第8節 木脇遺跡 (国富町大字木脇字上野原)

1 遺跡の立地

本遺跡は大淀川水系岩知野川の南に位置し、標高約30m～50mの南面する緩やかな台地にある。遺跡南の塚原台地上には5～6世紀にかけて築造された木脇塚原古墳群、北西には木脇城跡がある。また、眼下には水田地帯が広がっている。

2 調査の概要

遺跡の基本層序は第20図のとおりである。包含層は第Ⅱ層～第Ⅲ層、第VI層～第IX層である。調査区は遺跡の北側から、A、B、C、D、E区の5つに分けて調査を行った。

A・B区は遺跡の北側の東辺に派生する小丘陵状地形の根幹部にある。耕作によりアカホヤは削平を受けている部分が多くたが、B区の一部にアカホヤの上の黒色土層が残っている部分もあった。第Ⅱ層で中世の道路状遺構を1条、アカホヤ面でピットを検出した。アカホヤ下の調査では、第Ⅶc層から旧石器時代の頁岩を中心とする剥片群を1ブロック検出し、頁岩の母岩と剥片は接合関係が読み取れる。また、第IX層でも頁岩を中心とする剥片群を1ブロック検出した。遺物は頁岩製ナイフ形石器、チャート製剥片尖頭器等が出土した。縄文時代早期の遺構は、集石遺構約40基、炉穴12基（単独10基、切り合い2基）がある。炉穴の中には集石遺構の下位から検出されたものもある。遺物は、吉田式土器、貝殻文（条痕文）土器、押型文（山形・楕円）土器、打製石鎌、磨石、石皿等が出土している。

C、D区は遺跡の中央に位置する南向きの緩斜面にある。C区の北端ではアカホヤは削平を受け、南端ではアカホヤは切られており縄文早期の遺構の広がりは見られなかった。D区でも北側は第Ⅶa層まで削平を受け、第Ⅷb層から調査を進めた。旧石器時代ではD区北側において、頁岩を中心とする剥片群を1ブロック、攪乱層からは三稜尖頭器が出土した。縄文時代早期の遺構としては、C区南端で集石遺構を1基検出した。C区では平成7年度の確認調査で、古墳時代の住居跡が検出されていた。調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡が30数軒検出された。平面プランは方形で、規模は平均的なものが一辺約5.5mである（写真21）。主柱穴は多くが4本で、中には1本、2本、5本のものもある。また、住居の中には壁帶溝を持つもの、中央に埋甕を持つもの等がある。遺物としては、土師器の高壺、高台付壺、甕、壺等、須恵器の高壺、壺身、壺蓋等多数が出土した。遺物の時期は古墳時代中期及び後期と考えられる。平安時代の遺構は、住居跡が数軒あり、甕を持つものもある。平面プランは方形で、規模は一辺約2.5mの小さいものがあり、割と小さい。その他、掘立柱建物跡10数軒、溝状遺構数条、土坑数基を検出している。遺物としては、布痕土器、鉄劍、鎌等を出土している。C、D区では、古墳時代及び平安時代の竪穴住居が確認されているが、時期や分布等の詳細については、今後検討をしていきたい。

I	耕作土
II	黒褐色土
III	黒色土
IV	アカホヤ二次堆積層
V	アカホヤ火山灰層
VI	明褐色土
VI a	暗褐色土
VI b	暗褐色土 (小林鉱石のブロック)
VI c	暗褐色土
VII	褐色土
VII a	褐色土（硬質）
X	にぶい黄褐色土
XI	明黄褐色土
XII	姶良・丹沢火山灰層

第20図 基本土層図

E区は遺跡の南端にある。耕作によりアカホヤ下層まで攪乱を受けていた。旧石器時代では頁岩を中心とする剥片群1ブロックを検出した。縄文時代早期の遺構としては、集石遺構を約30基、炉穴(第22図)を数基検出した。炉穴の中には集石遺構の下位から検出したものもある。集石遺構では第21図のように径約100cm、掘り込みも約60cmと深く、敷石を持つものがある。遺物としては前平式土器、押型文土器、平格式・塞ノ神式土器等が出土した。古墳時代の遺構としては竪穴住居跡6軒を検出し、平面プランはC、D区と同様である。残存する壁高が10cm内外で遺物の数も少ない。また、時期不明の溝状遺構も数条検出した。

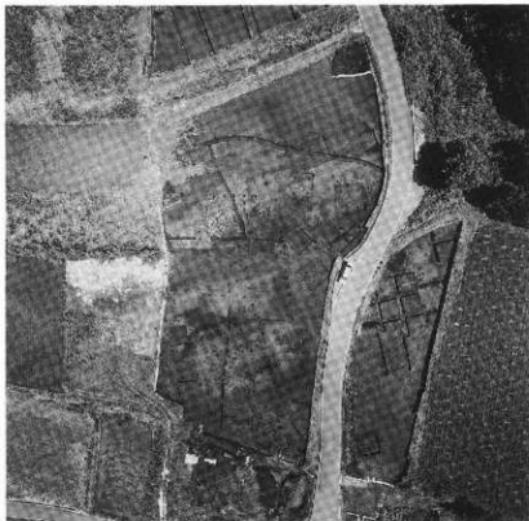
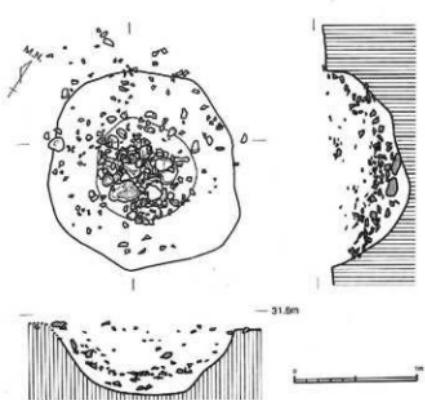
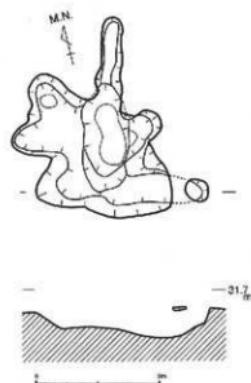


写真21 木脇遺跡 C区全景



第21図 木脇遺跡 E区58号集石遺構実測図 (1/40)



第22図 E区6号炉穴実測図 (1/80)

第9節 つかばる 塚原遺跡 (国富町大字塚原字西ノ免)

1 遺跡の立地

本遺跡は国富町の東端に位置し、本庄川と岩知野川にはさまれた標高約35m~40mの塚原台地上及び台地の東眼下の沖積地に所在する。台地の東すそにはせまい段丘状の地形が見られる。

調査に当たっては、水田部分をA、B区、段丘部分をD区、台地部分をC区の4つに分けて実施した(第23図)。

2 調査の概要

水田部分 (A、B区) 及び段丘部分 (D区)

水田部分の基本層序は第24図のとおりである。指標となる層は第IV層の文明ボラの混じる層である。

I 表土 (耕作土)
II 暗灰色砂質土
III 暗灰褐色砂質土 (高原スコリアと文明ボラを含む)
IV 暗灰色土 (文明ボラの混じる層)
V 暗灰色シルト質土
a 暗褐色砂質土 (植物遺体が層を成す)
b *
(明褐色粘土を部分的に含む)
VI 泥炭層

第24図 基本土層図

調査対象地域を決めて行った。その結果、B区の西半分では近世の水田面を検出し、東の部分については、第IV層直下面で棚田を検出した。棚田は北から南へうねった形をしており、東から西へ段状になっている。区面規模は小さい。水田面の時期については、第IV層直下の水田面であることから、中世後半（15世紀中頃）と考えられる（写真22）。さらに、幅約6mの溝状遺構が検出され、堰と思われる施設も確認できた。

D区については、段丘部分からの流れ込みと考えられる遺物が第IV層から多量に出土している。遺物は、古墳時代中期の把手付椀と考えられる須恵器をはじめ、古墳時代の



A区については平成8年
度から引き続き調査を行つ
た。検出された遺構は溝状遺構、畦畔で、その他に牛の足跡も検出さ
れている。弾丸暗渠による掘削部分が多く、文明ボラの残存する層は
ほとんどない。溝状遺構からは古墳時代中期や平安時代の遺物が出土
し、その他には寛永通宝があるが、遺構等はともなうものではない。
水田の時期については、土層及び水田耕作面の出土遺物から近世以降
と考えている。

B区の調査は土層観察とブ
ラントオバール分析の結果か
ら、第V層面に水田が存在
すると推定され、それを基に

する



写真22 B区水田検出状況

遺物や平安時代の遺物が混在して出土している。

台地端部（C区）

本遺跡台地端部分（写真23）は、町教育委員会が調査した「塚原遺跡」の東端部に位置している。台地上には、昭和11年に県指定された「木脇（村）古墳」の第1～12号古墳があり、調査隣接地には、未指定の古墳がある。

こここの土層は比較的標準な層序を成している。I層が表土、II層が黒色土、III層が黒褐色土、IV層がアカホヤ火山灰層、V層が褐色土、VIa層が黄褐色土、VIb層が灰黃褐色土、VII層にシラスを含む灰黃褐色土、VIII層が成層シラスとなっている。

調査区については、西側が開墾により削平を受け、II層～V層上部を失っているほか、東側と南側は急斜面で地滑りを起こしている。またa42～c42グリッドにかけて断層が確認されている。以下確認された遺構・遺物について時代別にふれていくことにする。

（1）旧石器時代

VIb層～VII層上部にかけて、頁岩及び砂岩で作られた畦原型の細石核、細石刃が数個出土している。また、頁岩を中心とした剥片等が西側～南西部にかけてブロック状になって出土している。遺構は検出されなかった。

（2）縄文時代草創期

VIIa層～VIb層にかけて隆帶文土器が多数出土している。石器については、石斧、石鎌、スクレイバー等が出土し、石斧については、片刃局部磨製石斧（仮称）を出土している。遺構については、石器の埋納遺構（写真24）が検出されたが、掘り込みは確認できなかつた。埋納された石器は片刃局部磨製石斧と敲打具で、南北方向に並列に置かれてあった。その他には、集石が3基程検出されている。



写真25 C区石列遺構検出状況

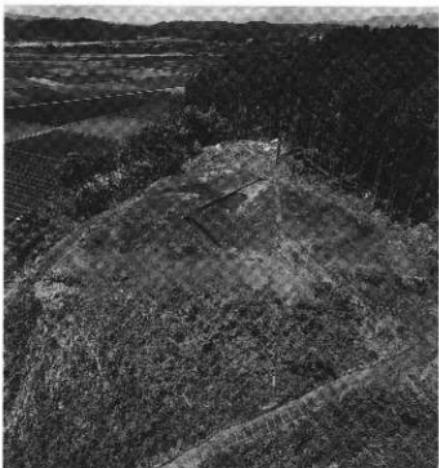


写真23 塚原遺跡 C区全景



さらに石列1基（写真25）が検出されている。規模は、東西方向に長さ約7m幅約0.6mで、南側部分の石は、長軸約25cm、短軸約15cm程有り、やや傾ける形で直列している。しかも掘込みがあり、北側部分には径6～8cm程の楕円礫が崩落した形で散乱している。その遺構の中から長径約5cm程度の隆帶文土器が数点、また、隆帶文土器の胴部を利用した分銅状の土製品が出土してい

る。その他早期の押型文土器片が1点出土しているが、小片であるので、石列の時期は草創期の可能性が高い。

(3) 繩文時代早期

V層において集石遺構9基を検出している。うち2基は径1m~1.2mで掘込みがあり、いずれも配石が有る。遺物は、貝殻条痕文土器、無文土器、押型（山形）文土器等が出土している。石器については、打製石鎌、剥片等が出土している。

(4) 弥生時代

II~III層から土坑1基、土壙墓3基が検出された。土坑は径約2mの円形プランで、遺物は、完形に近い弥生中期の無頸壺が出土している。土壙墓1基（写真26）は、長軸約2m、短軸約1mの方形プランで二段掘になっている。その他の1基から磨製石鎌が2点出土している。

(5) 古墳時代

調査隣接地にある未指定の古墳は、長径約15m、短径約10mの楕円形をしていて、墳丘の高さが約1.5m程ある。

今回、台地東端部で発見された古墳は、墳丘が、径約13mで、墳丘のほぼ中央に主体部がある。その墳丘は地山整形されており盛土部分を確認したが、立地条件から、高さはあまりなかったと考えられる。周溝の幅は1.5から2mほどで、東側は地滑りによって欠落している。主体部の墓壙（写真27）は、長軸約4m、短軸約2mで、中央の埋葬部分は、約10cm幅の粘土の帯が長方形状に巡らされ、その内側の長輪は約2m、短軸は約1mである。埋葬方法は立地や墳丘の状況から割竹形木棺直葬と推定される。粘土帶は、棺の蓋と身の目張りと考えられる。出土遺物は粘土帶の中から、鉄製品が3点ほど出土し、その内の1点は鉈である。棺内からはガラス製小玉が1点出土している。

また、周溝の一部からは、配石遺構が検出され、その中から、櫛描波状文のある二重口縁の土器が出土している。

古墳の築造時期については、出土遺物等から古墳時代前期と考えられる。

その他の遺構としてはスロープ付土坑を3基検出している。うち1基は、墓壙が土坑の一部を切っている。また、1基は、古墳の墳丘下で検出されており、後者の土坑中程からは軽石製品が出土し、うち1点は家形か、あるいは男根をかたどったものである。スロープ付土坑3基の埋土からは弥生中期の土器片が出土しており、また、古墳との関係から、この遺構の時期は、弥生中期から古墳前期の間のものと考えられる。

その他の遺物としては、土師器や須恵器等が出土している。



写真26 C区土壙墓完掘状況



写真27 主体部完掘状況

第10節 中別府遺跡（宮崎市大字金崎字中別府ほか）

1 遺跡の立地

本遺跡は、宮崎市西部、本庄川の右岸金崎地区に位置している。

当地は、標高約10m。地形的には、本庄川沿いに東から西に伸びた自然堤防上の西端にあり、南に緩やかに傾斜しながら農業用水路を抉んで倉岡遺跡へと続いている。明治44年には北側の微高地を削り、南側の低地を埋め立ててという耕地整理が行われている。南側にある現水田は、低地にあり、大雨になると水没する。

調査地東の集落内の畠では、弥生時代以降の遺物が採集される。また、近くの朝倉觀音周辺でも弥生土器の出土が確認されている。



写真28 中別府遺跡 調査区全景

2 調査の概要

平成9年1月の確認調査をもとに、県道北側をA区、南側をB区とC区に分け、水田遺構の検出を主眼において調査を進めてきた。

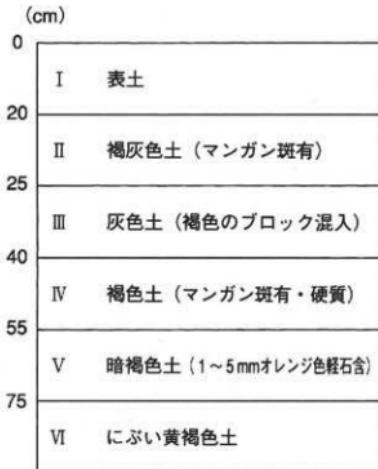
（1）A区

本区は、自然堤防上の西端にある。基本土層は右図の通りであるが、第Ⅰ層から第Ⅲ層までは擾乱状態にあり、遺物も全体的に出土数が少ない。

第Ⅳ層では、近世の陶器や瓦などと共に須恵器や青磁劃花文稲花皿（明時代）が出土している。また、第V層からは近世の陶器に加え、古代の壺や弥生時代のものと思われる壺形土器の底部などが出土している。第VI層では、遺物はほとんど出土していない。

遺構は、第VI層面から掘立柱建物跡2棟を確認した。溝状遺構とピット群も検出されているが埋土はV層であった。

このように、調査地のほとんどが耕地整理で削



第25図 A区基本土層図

平を受けたり、本庄川護岸工事の影響を受けており、重ねて調査直前まで、樹木栽培による植え替えや、枯木の埋め込みなどが行われていたため、各層への攪乱が顕著であった。

以上のことから、遺構の時期については古くても近世以降あるいは近代の可能性もあると考えられる。また、第VI層以降の層からは遺物・遺構等は検出されなかった。

(2) B区

本区は、9月までビニルハウス栽培のため試掘を実施できなかった区画を中心に、40m四方の外周トレンチを設定し、土層の観察を行った。その結果、水田が存在する可能性が極めて低いと判断され、また、自然科学分析の結果も同様であったので調査は実施しなかった。

(3) C区

本区は、倉岡遺跡のすぐ下にあり、自然科学分析の結果、層を異にする2地点で稻のプラントオパールが検出された。C区北半部では、畝状遺構・畦畔が検出されたが、時期的には近代以降と推定している。C区南東部でも、高原スコリアを巻上げた層（第VI層）から、わずかではあったが稻のプラントオパールが検出され中世の水田跡の存在が予想されたが、畦畔等を確認するまでには至らなかつた。

さらに、外周排水溝の土層断面からは、調査区中央を南北に走る旧河道が想定されたので、河道進路確認のためのトレンチを7本設定して調査を行った。その結果、調査区の中央付近で2つに分岐した深さ約3m・幅約8mの旧河道が確認された。旧河道底部の砂質土の中からは、縄文晩期（夜丘系）のものと思われる貝殻条痕文土器（胴部）や、二重口縁部に櫛描波状文が施された弥生後期の壺形土器（口辺部）が出土した。また、古墳Ⅲ期の特徴を持つ須恵器甕（口辺部から耳付き頸部にかけて）や土師器、さらに古代の黒色（内黒）土器や布痕（製塙）土器の各部、そして、ヘラ切り底の坏に墨書きを施した墨書き土器などが出土した。その混入密度は大きなものとは言えないが、隣接する倉岡遺跡と同時期のものであり、ほとんど磨耗していないことから、同遺跡あるいは近くの遺跡からの流れ込みであろうと考えられる。

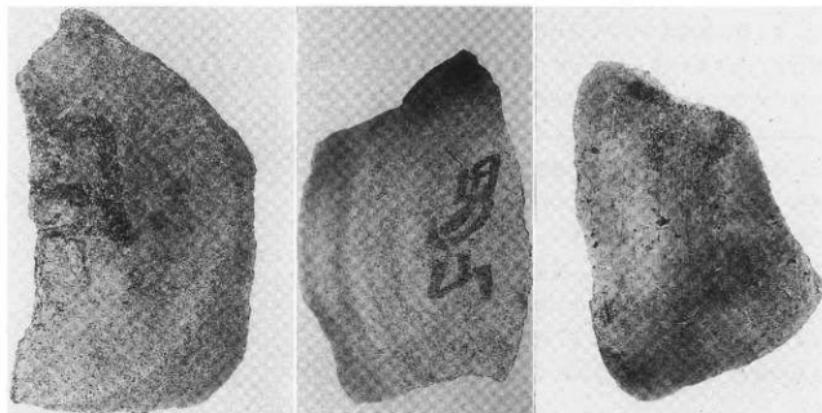


写真29 中別府遺跡 出土墨書き土器

第11節 くらおか 倉岡遺跡 (宮崎市大字金崎字寺尻ほか)

1 遺跡の立地

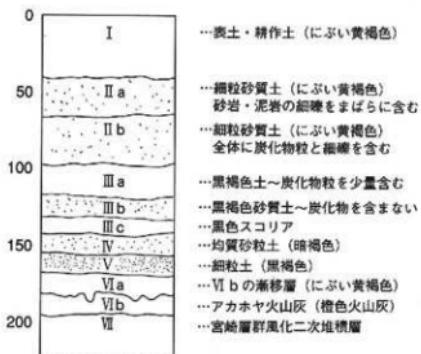
本遺跡は、宮崎市と国富町の境界を流れる本庄川の右岸に形成され標高約20~50mにかけての小高い丘の上に位置する。調査地は比較的平坦な箇所が3カ所あり、調査の都合上、南側をA区（標高約50m）、中央部をB区（標高約30m）北部をC区（標高約20m）とした。B区からC区にかけての東側の谷部には湧水点が確認されている。A区は戦後、サツマイモ畑として耕作されていた。B区には近代の炭焼き窯跡が確認され、その後の土地利用は現代に至るまで杉を中心に植林されていた。また、A区の西側には朝倉觀音寺、遺跡の南西方向に倉岡古墳、北側には水田地帯が広がり、本遺跡の北眼下に中別府遺跡がある。

2 調査の概要

本遺跡の中心はA区で、基本となる層序は、年代の指標となる火山灰として、III c層に高原スコリアと思われる黒色スコリア層が10~20cm、VI b層ではアカホヤ火山灰が15~30cm堆積している。また、A区は3つの小高い丘にはさまれた谷部にあたり、地層の堆積に指交堆積（インターフィンガー）が見られた。遺物包含層はIII a~c・IV・V層で確認されている。調査区の大半は杉の植林および切り出しなどによる擾乱を受けている。以下、確認された遺構・遺物についてふれていく。



写真30 倉岡遺跡 調査区全景



第26図 倉岡遺跡 土層断面柱状図

(1) A区

試掘などの結果より、調査当初、中世の陶磁器片などが出土し、寺院跡もしくは山城跡ではないかと考えられたが、杉を中心とする植林や切り出しなどにより遺物包含層のⅢaまで搅乱されているところが多く、掘立柱建物跡などの遺構は確認できなかった。遺構は、Ⅳ～V層から竪穴住居跡6軒（古墳時代2軒、古代の住居跡が4軒）、時



写真31 倉岡遺跡 A区竪穴住居跡分布状況

期不詳の土坑1基、集石遺構1基を検出した。住居跡内の遺物の底部に木の葉の圧痕（木の葉底）が見られるもの、粘土紐作りで、注口が見られるもの、高坏や須恵器の坏などから古墳時代後期から古代と考えられる。どの住居跡からも炉跡は確認されなかった。

遺物は調査面積にすれば比較的多く、Ⅲa～c層から黒色土器、回転ヘラ切りの土師器、格子目の叩きがある須恵器片、布目痕土器などが多数出土している。IV層からも多数の土器片、土師器片、須恵器片が見られる。V層からは縄文時代後期前半の指宿式土器、綾式土器が出土した。古代の遺物の甕などには奈良時代のものがみられる。また、石器としては、石鎌、石錐、砥石、磨製石斧なども出土している。

(2) B区

本遺跡の中心と考えられたが、A区と同様に搅乱が激しく、遺物の包含層は表土直下とその次の層（明褐色土）の2層である。残念ながら遺構は確認できなかったが、遺物は縄文時代晩期と思われる孔列文土器片、弥生時代後期と思われる浮文のある壺の口縁部、中溝式の甕の胴部、および中世の備前焼擂鉢などが出土した。その他少数ながら時期不詳の須恵器片が出土している。石器は打製石斧、磨製石斧、石包丁様石器などが出土しているが、縄文か弥生かの時期の時代特定は今のところ不明である。

(3) C区

中別府遺跡に隣接し、面積は256m²と小さい。遺物の出土状況はB区と似ており、縄文時代晩期と思われる孔列文土器片、石器は打製石斧が出土しているが、遺構は時期不詳の土坑1基（埋土は1層で、にぶい黄褐色土）が検出されたのみであった。

また、表土直下からは寛永通宝が24枚出土した。

まちやしき 第12節 町屋敷遺跡（宮崎市大字糸原字池ノ内）

1 遺跡の立地

本遺跡は、宮崎市北西部の大淀川によって形成された自然堤防の後背湿地と丘陵地に挟まれた沖積地である。その中央部を大淀川へ流れ込む内の丸川が西から流れしており、調査地は一段低い場所となっている。調査地周辺には、倉岡古墳が分布するほか自然堤防上には古墳時代の遺物も出土している。

2 調査の概要

本遺跡の基本層序は右記のとおりである。土質は、第Ⅱ層から第Ⅳ層までは水分を含むと強い粘性があるため、乾燥すると固くなるとともに縦に亀裂があり、崩落する性質を持っている。調査は平成9年の1月より実施し、調査地は便宜上、調査順にA・B・C・Dの4区に分けている。当地は、水田跡の存在が考えられたためプラント・オパール分析を行ったところ、第Ⅰ層から第Ⅴ層まで検出されている。そこで、調査の目的を水田跡と旧河道と思われる大溝の検出とした。

（1）A区

A区は、水田は確認されなかったが大溝が検出されている。この大溝は、幅9mで西から東へ流路をとり埋土の状況から4期に分けられる。1期の幅が5mで4期の幅が2mとなっており、4期の溝から埋跡を2ヶ所検出した。この埋跡は、薄く剥がした樹皮を直径15cmの杭に横木を当てて固定し、水の流れを効果的にせき止めている。

遺物は、1期の溝の底面から弥生時代後期と古墳時代中期の高杯・壺・甕・ミニチュアなどの土器が多数出土し、石器も1点（礫）出土した。また、木器3点・網代1点が出土し、木器の扉状の板は、70cm×150cmの長方形で一辺の両端には突起状の部分があったと思われるが一方は欠損している。遺物については流れ込みと思われる所以溝の時期については今後の課題としていきたい。

（2）B区

B区は、プラント・オパールから見ると2境界面で水田跡の存在が予想されたが、調査区内が過去に起きた地震によって第Ⅱ層から第Ⅳ層までが褶曲していることと、第Ⅱ層と第Ⅲ層が比較的新しい層であり、第Ⅴ層に人為的な加工を施した畦畔状の高まりが確認されたことなどから、残存状況のよい第Ⅳ層と第Ⅴ層の境界面で調査を行った。

遺構は、水田跡・溝状遺構・埋跡が検出された。水田跡は、14枚の区画が検出された。区画は不定形であるが、一区画1.5m×3mのものがある。畦畔は、溝状遺構に平行に延びるもののかに十文字状や放射状の連結を呈する部分を有する。溝状遺構は3条検出されたが、その内の2条は現代のもので1条は第Ⅴ層の上位から掘り込まれたと考えられる。調査区西部を北から南に向かって流れ

I	耕作土
II	黒褐色粘土 (文明軽石混)
III	黒褐色粘土
IV	灰色シルト質土
V	シルト互層 (ラミナ状)
VI	二次堆積シラス

第27図 基本土層図

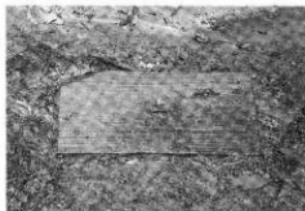


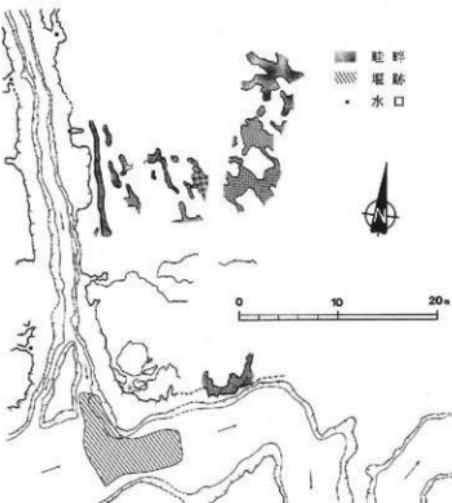
写真32 扉状木製品出土状況

る幅5mの溝が、調査区南部を西から東に向かって蛇行しながら流れる幅9mの大溝に合流する形で検出された。南北に流れる溝には、水田に水を引き込むための水口も確認された。この溝の最下層からは、高壙・壇・小型丸底壺・甕などの大量の土器のほかに磨製石鎌や砥石などの石器が出土した。時期は、弥生時代後期と古墳時代中期のものである。溝の埋土状況から見て、大きな洪水で短期間で埋まつたと考えられる。堰跡は、2本の溝の合流部で2時期のものが確認された。最下層から押し倒された形で検出されたものの大きさは、幅6m・長さ9mで、4列の杭列から構成されており、水を溜める内側の部分には、貯水性を高めるために薄く剥がした木の皮が張ってあり、一部は、樹皮を編み合わせる加工をほどこしたものもあった。

水田は、形状と溝の底から出土した遺物から古墳時代の可能性があるが、時期については今後検討していく。溝は、出土遺物から古墳中期以降のものと推定されるが、こちらも時期と性格について検討していかねばならないところである。

(3) C区

C区は、土層及びプランツ・オ・パールの結果から第II層と第III層の境界面で水田検出を行った。調査の結果、7枚の水田の畦畔が確認された。区画は一辺が8mである。水田の時期は、出土遺物からは判断できないが、1476年降灰といわれる文明軽石が水田面に堆積していることや畦畔が直交していることと区画の大きさから、中世末から近世あるいは近代の可能性もあるので、今後検討していく。



第28図 B区遺構分布図 (s=1/500)



写真33 町屋敷遺跡 B区堰跡検出状況
結果から第II層と第III層の境界面で水田検出を行った。調査の結果、7枚の水田の畦畔が確認された。区画は一辺が8mである。水田の時期は、出土遺物からは判断できないが、1476年降灰といわれる文明軽石が水田面に堆積していることや畦畔が直交していることと区画の大きさから、中世末から近世あるいは近代の可能性もあるので、今後検討していく。

第13節 きこうち 迫内遺跡 (宮崎市大字富吉字迫内)

1 遺跡の立地

本遺跡は、宮崎市大字富吉の大淀川右岸に隣接する市道富吉小松線の南の丘陵部分に位置する。

周りには住宅がひしめきその間に水田が点在する。北に町屋敷遺跡、東に友尻遺跡・鳥ノ子遺跡があり、水田跡が検出されている。

2 調査の概要

本年度は、市道富吉小松線の南側の丘陵部分の第二次確認調査をおこなった。丘陵部分の中段から斜面にかけて五輪塔の空風輪がみられたために、丘陵地は五輪塔群が検出される可能性が考えられたために調査対象地にいた。丘陵地の下の平地部分は、竹林になっていたが4カ所トレンチをいた。どのトレンチからも、黒色の層で土師器の小片が出土した。また、旧10号線の間の人家の庭・西側の周辺の聞き取り調査で横穴があったとの伝承があり、周辺に古墳時代や中世から近世等の遺跡が存在することが考えられたので、市道富吉小松線より南側の丘陵部分から国道旧10号線の間を平成9年度と平成10年度の2カ年にわたり全面調査することになった。

平成9年度の本調査にあたって、便宜上2つの地区に分け、丘陵部分をA地区、平地部分をB地区とした。廃土の関係からA地区から調査を開始した。A地区的層序は第Ⅰ層が竹の根を含む表土で、第Ⅱ層が黒色土、第Ⅲ層がアカホヤ火山灰層で第Ⅳ層は岩盤である。B地区は層序的にはⅠ層が表土及び擾乱でⅡ層が黒色土で砂を多く含む。Ⅲ層は黒色土で粘性が強い。Ⅳ層は褐色の粘土である。

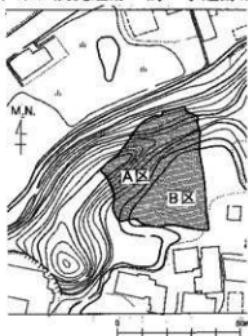
(1) 古墳時代

主な遺構としてA地区の丘陵上の西の頂上付近に土坑が1基あり、その中に古墳中期ごろの高杯の脚部などの遺物があった。また、西の丘陵を掘り込む形で横穴が確認できたが、遺物は伴っていない。

(2) 中世～近世

主な遺構としてA地区では五輪塔群がある。丘陵部中段のテラス部分に在り、7群で1単位3基が基本と思われる。敷石は、幅2mぐらいで石塔を取り囲むように敷き詰めてある。また、石塔群西側の岩肌に板碑状の掘り込みをもち、その窓みに石塔の一部が残り、その下には、奥行き3m・幅1mの横穴がある。祭祀遺構と思われるが、その横穴の性格については現在確認中である。

主な遺構としてB区では褐色の粘性土に丘陵の一部に沿うように溝状遺構がある。石塔群とどのように関係するかは今後確認していきたい。ほかに、褐色の粘性土にピット群が検出された。しかし、ピットの中には、掘立柱建物を構成するものは確認できない。遺物としては、土師器(糸切り底)の小皿が多く、陶磁器その他の生活に使う土器類は、現在のところ擾乱または表面採集以外確認していない。また、出土状況は、丘陵に沿うようにして遺物の分布がみられた。しかも、小皿が単体で散らばっている状況である。したがってB区の出土土器の多くはA区の流れ込みと考えられる。出土遺物のうち糸切り底の土師器の小皿は、近世まで残ると考えられるので五輪塔の時期については中世から近



第29図 迫内遺跡 周辺地形図

世と今段階では幅をもたせて報告しておきたい。



写真34 五輪塔検出状況（東から）



写真35 地輪・水輪等検出状況（東から）



写真36 板碑等検出状況（西から）



写真37 横穴及び線刻板碑検出状況

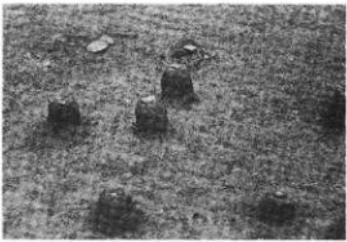


写真38 遺物出土状況(1)

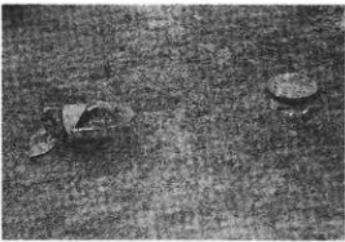


写真39 遺物出土状況(2)

第14節 内宮田・塙田遺跡一塙田地区一（宮崎市大字長嶺字内宮田ほか）

1 遺跡の立地

本遺跡は、大字浮田を東流する大谷川の両岸に位置する内宮田・塙田・清田追遺跡（仮称）の一部である。平成8年度は、左岸の内宮田地区の発掘調査を終了した。今年度は、右岸の塙田地区を発掘調査した。報告書では、それぞれの名称を「内宮田遺跡」、「塙田遺跡」と予定している。

本遺跡は、標高38m内外の丘陵の裾野の段丘（写真40）に位置する。原地形は、北側の大谷川方向に落ち込む丘陵に挟まれた谷部分と推定される。

本遺跡の南東100m内外の丘陵部分に位置する高添遺跡での分布調査では、古代を中心として弥生時代から近代にかけての土器や磁器を表面採集した。左岸の調査では、古代の水田跡と古墳時代に位置付けられる可能性のある水田跡を検出した。本遺跡から東へ1km大谷川を下ると、大量の墨書き器を出土した余り田遺跡がある。遺跡の現況は畑地と水田である。

2 調査の概要

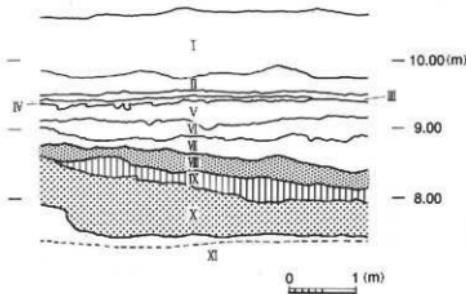
調査区の南側の擾乱を受けた部分を排土置場にし、調査区を約400m²の長方形に設定した。周囲に第XI層に達するトレンチを掘り込み、遺物包含層を確認した。層序は右掲する土層断面模様式図（第30図）のとおりである。第Ⅸ層はシルト質の土と砂の互層、第Ⅹ層は植物遺体を多量に含む黒褐色から茶褐色を呈する層である。第Ⅶ層から第X層が遺物の包含層である。

層毎に出土した遺物の時代の幅が広く土器片が多いことから、長年の流れ込みや廃棄等に起因する遺物の集中（写真41）と考えられ、遺構を確認できなかった。

出土遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、磁器、木製品など様々である。



写真40 塙田地区 近景（南から）



第30図 塙田地区 土層断面模式図

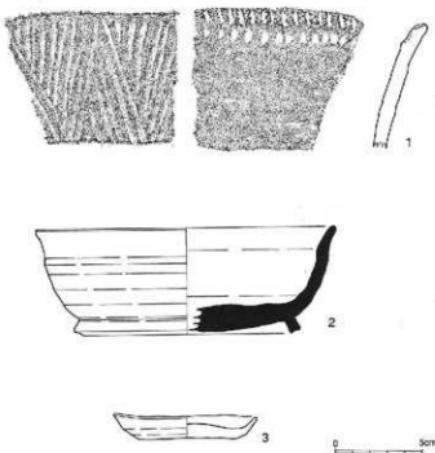
縄文時代の土器は、前期の曾畠式土器（第31図の1）、弥生時代の土器は、後期を中心として壺・甕・高坏がある。古墳時代の土師器は中期から後期の壺・甕・坏・高坏、須恵器は後期の甕がある。古代の土師器は甕・坏・高台付坏・皿・布痕土器・黒色土器、須恵器は高台付坏（第31図の2）・蓋・甕がある。比較的完形に近い土師器の坏は、9世紀から10世紀に位置付けられるものが多い。碗の底部に工具による直線を組み合わせた線刻があるものがある。また、現時点で15点ほどの墨書き土器を確認している。それらは土師器の坏の底部や胴部の外面に「要」、「寸」、「落」の文字をもつ（宮崎産業経営大学講師・柴田博子氏の御教示による）。底部高台内で筆をならしたような墨痕があるものが1点ある。これらは余り田遺跡の墨書き土器と、器形等の共通性がみられる。須恵器片に窓壁が付着したもののが1点ある。中世の回転糸切り痕のある土師器の坏・皿（第31図の3）、陶器は東播系こね鉢（13世紀末～14世紀）、綠釉陶器の碗、瓦器の碗の一部、南宋輸入の龍泉窯系青磁の碗（12世紀）がある。

木製品は、曲物の側板とみられるもの、容器の一部、用途不明のものがある。曲物の側板とみられるものは、内面側に平行線と斜平行線を組み合わせる斜格子状のケビキ線をもつ。

遺物のほとんどは日用品である。磨耗が比較的少なく、完形に近いものも出土している。口縁部等から推定できる個体数は比較的多いが、破片が多い。これらの接合は困難である。このようなことから遺物の廃棄場所であった可能性もある。遺物の由来する遺跡本体が、本遺跡の近くにあったことも推測される。余り田遺跡、内宮田遺跡等の出土遺物との関連も視野に入れ、今後遺跡の性格を検討していきたい。



写真41 第IX層遺物出土状況



第31図 塙田地区 出土遺物実測図・拓影

第15節 本城跡 (宮崎市古城町本城) もとじょうあと

1 遺跡の立地

本遺跡は、宮崎市古城町本城に所在する。宮崎市街地を見下ろし、開析谷によって隔てられた標高約100mの比較的急峻な二丘陵上に築かれた山城跡（中世・近世）である。城の東に山ノ城跡・古城跡（太田城跡）、さらに1km東に伊東四十八城に数えられる曾井城跡（現野崎病院）を眺望できる。城の西側は、比高差約60mの急斜面をなして眼下に古城川を望む。谷を挟んで北側の城、南側の城と分けて記述する。昨年度は、主として北の城を中心に、本年度は曲輪VIの一部と南の城について調査を実施した。調査を行った曲輪の概要は以下の通りである。

2 調査の概要

（1）本城の構造

縄張り図からみると、北側の城は標高約110mの曲輪Iを主郭とし、放射状に小郭を配する構造である。現存では堀切が1本と、曲輪I南端と曲輪VI東端に土壘が確認できるのみで屋敷地的な様相を示している。一方南側の城は、見張り台と考えられる高まりや、虎口・土壘といった人為的な遺構が現地形からも確認できる。ともにシラス台地縁辺の適地を城取りし、堀や土壘によって区画される県南地域に多く分布するタイプである。

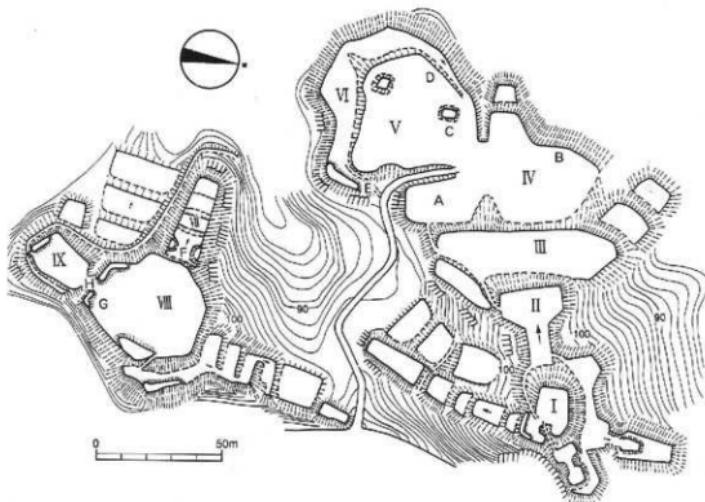
（2）北側の城

調査を行った曲輪IV・V・VIおよびAは、城域の西端にあたる。曲輪IVでは、すくなくとも4棟の掘立柱建物跡が確認され、地山成形による造成が3段みられた。曲輪IVは現況は平坦地であるが、複数の曲輪により構成されていた可能性が考えられる。曲輪Vは、シラス層まで造成を行い平坦地を作り出している。曲輪内からは土坑約50基、溝状遺構6条（近世2条）、井戸跡1基、柱穴群が検出された。南端部では板状の石を敷設した遺構が確認された。曲輪内通路とも推定されるが詳細については今後検討を要する。また縄張り図C地点に現存周囲約10mを計る壇状の高まりがあり、ヘラ切り底・糸切り底の混在する土師皿が10枚数枚重なって出土した。神社の伝承も存在することから祭祀関連の遺構の可能性もある。曲輪の縁辺部に若干の高まりがみられることや、腰曲輪VIおよび虎口の位置関係などから考えると、周囲に土壘が巡っていた可能性が考えられる。腰曲輪VIからは、土坑約20基と掘立柱建物跡が少なくとも2棟確認された。縄張り図中のA地点南側に虎口の可能性のある部分がみられたが、明確な判断は下せなかった。調査区外のE地点に断面逆台形状をなす掘り込みがみられ、A地点とあわせて虎口の造り換えの可能性も検討しなければならない。また、土壘を周り込み腰曲輪VIを通過し曲輪Vに至るルートも想定される。

（3）南側の城

調査は、曲輪VII・IXとVIIIの一部について実施した。曲輪VIIのF地点から、幅約2m、深さ1.5~2mを計る薬研堀の堀切が検出された。中央部に地山が掘り残されている部分があり、上橋状の施設があった可能性が考えられる。曲輪VIIIより幅約3mを計る溝状遺構が1条検出され、糸切り底の土師皿片が床面から出土している。調査区が曲輪の一部分であるため、柱穴は検出されるものの掘立柱建物として認定できるものはなかった。G地点では、地山成形後土盛造成されたと考えられる土壘の痕跡

が認められた。曲輪のH地点から幅約5.7m、深さ2.5mを計る堀切が検出された。堀底付近の埋土から15世紀代の青磁片が出土している。H地点西側には、虎口が想定されたが、工事に伴う土取りによって形状および下段の曲輪の正確な範囲は確定できなかった。曲輪Ⅸの南縁には、上墨の痕跡が一部現存するが、他方の縁辺部にも若干の高まりがみられることから、曲輪の四周に土塁が巡っていた可能性がある。



第32図 本城跡 繩張図



写真42 曲輪VII 堀切検出状況（北から）

平成9年度
東九州自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ

平成10年3月31日

編集
発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0053 宮崎市神宮2丁目4番4号
印刷 株式会社 田中写真印刷
